

院 生 生 活 と は じ め

教官から新入生へのことはば

一橋大学社会学部助教

加 藤 哲 郎

①「他流試合のすすめ」 社会学部助教、加藤哲郎

新入生諸君を迎えて何か書いてくれとのこと、気軽に引きつけてはみたものの、はたと考え込んでしまった。私は、大学院の生活を全く経験していないのである。民間企業において、そのまま名古屋大学の助手に採用されたのがちょうど四年前だから、ドクターの院生諸君と研究歴はトントンというところである。そればかりではない。私たちの学部学生生活は、今では「伝説」化しているかの六八―七〇年の時代で、まともに授業を受ける機会もなかった。強いて学問に縁のあった生活をあげると、七二―七三年のドイツで

の各員アスピラント(修士課程)時代だが、日本の大学院制度とは随分あり方が異なっていた。したがって、以下に述べることは、私の友人たちの院生生活をみて考えてきたこと、およびこの四年生の助手、教員生活の中で感じたことに限定された、やぶにらみのアドバイスにすぎない。

その一。学界状況をよくつかんでおくこと。日本の学界には一種の「流行」現象があり、テーマや視角の設定にもそれは流れていく。この「流行」に迎合し自分の本当に研究したことを放棄したり自主規制するこ

象をみきわめ、そのグルントを探索することにより、自分のテーマと視角を練りあげる訓練を絶えず心がけてほしい。いいかえれば、学界における「流行」は、何らかの現実の歪められないし、一面的な反映なのであり、その現実への自己のアプローチを、たえず検証しようとする心がけ

がでこかに大抵のものなのである。テーマや専攻はちがっても、自分の研究が社会性をもっている限り、他分野のどのような研究からでも何がしかの得るものがあるはずである。問題はそれを、活字を通しての一方的受容に留めるか、そこで相互コミュニケーションを成立

せしめるかにある。できるだけ多数の学会、研究会に出席し、そこで必ずしも何かを獲得すること、さらに自分自身が何らかの発言を行ない、交流を深めていくこと、この点は、当面の自分の論文に直接役立つことがなくても、いつか、役に立つ時がくるものである。通俗的レベルでいえば、学会に「顔」を

売り、交通費・参加費は頭するところが推奨されがちである。ただし、貧欲さ、やるがそういう生活は必ずしも必要ではない。第三に、健康に留意すること。このあたりまえのことにストレスを解消しながら、順

象をみきわめ、そのグルントを探索することにより、自分のテーマと視角を練りあげる訓練を絶えず心がけてほしい。いいかえれば、学界における「流行」は、何らかの現実の歪められないし、一面的な反映なのであり、その現実への自己のアプローチを、たえず検証しようとする心がけ

がでこかに大抵のものなのである。テーマや専攻はちがっても、自分の研究が社会性をもっている限り、他分野のどのような研究からでも何がしかの得るものがあるはずである。問題はそれを、活字を通しての一方的受容に留めるか、そこで相互コミュニケーションを成立

せしめるかにある。できるだけ多数の学会、研究会に出席し、そこで必ずしも何かを獲得すること、さらに自分自身が何らかの発言を行ない、交流を深めていくこと、この点は、当面の自分の論文に直接役立つことがなくても、いつか、役に立つ時がくるものである。通俗的レベルでいえば、学会に「顔」を

売り、交通費・参加費は頭するところが推奨されがちである。ただし、貧欲さ、やるがそういう生活は必ずしも必要ではない。第三に、健康に留意すること。このあたりまえのことにストレスを解消しながら、順

象をみきわめ、そのグルントを探索することにより、自分のテーマと視角を練りあげる訓練を絶えず心がけてほしい。いいかえれば、学界における「流行」は、何らかの現実の歪められないし、一面的な反映なのであり、その現実への自己のアプローチを、たえず検証しようとする心がけ

紹介

『若き科学者へ』

P ・ メダウオー、鎮目恭夫訳

古く東西を問わず、先れが表紙に印刷されているが、の助言の書は多い。だが必要を感じる者は、あまりいな

多くは、無内容である。いだろう)イギリスの実験病理

直接に「若き科学者へ」の助言

「科学者」となること

研究室紀要

『教育科学研究』を発売

大 立 都
教 育

一専攻ということで規模はたしかに大きくありません。しかし、教育学のトータルな探究が

求められている今日、様々な研

ありません。昨年は、教

「研究に熟練する最善の道は、